『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』20（2018）：229 － 251

首都圏におけるアイヌ語教育の現状

渡邊香織

キーワード：アイヌ語、アイヌ語教育、首都圏アイヌ

１．はじめに

本稿は首都圏におけるアイヌ語教育の実態について明らかにしようとするものである。現在、北海道と首都圏を中心にアイヌ語復興のための活動やアイヌ語教育が行われている。北海道と首都圏だけでなく、京都や福岡などでもアイヌ語の勉強会が開かれ、大学でアイヌ語を教えるところが増えてきているほか（中川・中本 2004：３）、内閣府による「イランカラプテキャンペーン」の影響かアイヌ語の挨拶言葉である「イランカラプテ」がテレビＣＭや商品名に使われているのも頻繁に目にするようになった。また、アイヌの少女がヒロインの人気漫画『ゴールデンカムイ』の影響で、アイヌ語の単語がインターネット上の投稿などに頻繁に見られるなど、アイヌ語をとりまく環境は盛り上がりを見せている。

アイヌ語の学習者は年々増えつつあるが、アイヌ語を教えられる人材の不足が田村すゞ子（2013）、田村雅史（2011）など多くの先行研究で指摘されている。では現在活躍している数少ないアイヌ語講師たちはどのようにアイヌ語を学習し教えられるレベルにまで至ったのか、また、現在どこでどのような方法でアイヌ語を教えているのか、アイヌ語教育の現状はどうなっているのか、以上の点を、首都圏の事例から明らかにすることを本稿の目的とする。対象地域を首都圏としたのは、北海道でのアイヌ語教育に関しては上野（2004）や小山（2015）などの先行研究がある中、首都圏におけるアイヌ語教育に関しては先行研究がほとんど見られないためである。

現在首都圏では東京にあるアイヌ文化交流センターでアイヌ語講座が開かれているほか、４年制大学や高校でもアイヌ語の授業が行なわれている。本稿は最初にアイヌ文化交流センターのアイヌ語講座について述べたあと、大学、高校でのアイヌ語授業について、授業を見学し講師へインタビューおよびアンケートを行なった結果を報告する。

２．首都圏に暮らすアイヌ

首都圏に暮らすアイヌは、進学や就職など様々な事情で北海道から移住してきた人々とその子孫たちである。

首都圏には関東ウタリ会、東京アイヌ協会、ペウレ・ウタリの会、レラの会という４つのアイヌ団体が存在する。このうち関東ウタリ会が東京都に東京在住アイヌの人口調査を要請し、1974年と1988

年に「東京在住ウタリ[1]実態調査」が行われた。調査は知り合いの知り合いを辿っていく機縁法で行われ、この調査で 438 人のアイヌが東京に住んでいることが分かったが、回答を拒否した者も 163 人いたという（大谷 1997：58-59）。機縁法で辿れなかった者も多数いると考えられ、この数から推定で約 2700 人のアイヌが東京に住んでいると言われる。範囲を首都圏に広げれば、数字はもっと膨れ上がるだろう。最も新しい調査でも今から 30 年前に行われた調査であるため、2018 年現在の状況はさらに違ったものになっていると思われる。

３．調査概要

筆者は 2017 年 10 月から 2018 年 6 月にかけて、首都圏の教育機関で行われているアイヌ語の授業と、アイヌ民族文化財団が行っているアイヌ語講座を許可を得て見学した。見学がかなわなかった授業については講師に普段どのような授業を行っているのかアンケートをとった。また、各講師たちにアイヌ語講師になった経緯、授業方法、現場で感じる問題点、今後の展望について聞き取りを行った。

４．アイヌ民族文化財団のアイヌ語講座

アイヌ民族文化財団（以下「財団」）は 1997 年に施行された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（通称『アイヌ文化振興法』）」に基づいて設立された機関である。2017 年にこれまでの「公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」から現在の名称に変わった。財団の事業の柱のひとつに「アイヌ語の振興」があり、アイヌ語教育事業として①指導者育成事業、②上級講座、③親と子のアイヌ語学習、④アイヌ語入門講座を行うほか、アイヌ語普及事業として①アイヌ語ラジオ講座、②アイヌ語弁論大会を行っている。このうち首都圏でも行われているのはアイヌ語教育事業の②上級講座と③親と子のアイヌ語学習、④アイヌ語入門講座であり、これらは東京八重洲にある「アイヌ文化交流センター（以下「センター」）で行われている。

４．１　上級講座

上級講座はアイヌを対象とした講座である。財団によると「アイヌ語教育の充実に向けて、アイヌ語研究者などの協力を得て、中級話者を対象に地域において講座を開設し、将来、アイヌ語教育の指導者となる上級話者の育成を図ろうとする事業」とされている。東京八重洲での上級講座は 1998 年から開始され、2018 年現在は月に 1 度、第 4 土曜日の 15 時から 18 時まで行われている。上級講座が始まるまでの時間はセンターで「親と子のアイヌ語学習」が行われており、「親と子のアイヌ語学習」に参加した後に続けて上級講座に参加している者もいる。

[1] ウタリとはアイヌ語で「親族」や「仲間」を表す。

４．１．１　講師について

上級講座の講師は 1998 年の開始当時から現在まで千葉大学教授でアイヌ語研究者の中川裕氏が務めている。中川氏は同じく財団の事業であり北海道で毎年行われているアイヌ語指導者育成事業の講師も務めている。神奈川県横浜市出身の中川氏は、東京大学言語学科在学中にアイヌ語を学び始め、今やアイヌ語に携わる者の中には知らない者はいないほどのアイヌ語の碩学である。中川氏は田村すゞ子氏にアイヌ語を教わりながら、学生時代より北海道平取町二風谷にてフィールドワークを行い、古老たちから数々の口承文芸を聞き取ってきた。また中川氏は、財団の発足当初から事業運営委員として予算の具体的な運営案や予算案の作成に携わり、現在は 2020 年に誕生する国立アイヌ民族博物館の展示検討委員会委員、「民族共生の象徴となる空間」におけるアイヌの伝統等に係る体験交流等活動に関する有識者検討会議委員、体験交流・情報発信検討部会委員も務めている。センターと千葉大学でアイヌ語の講義を行うほかに、アイヌ語教材の製作やアイヌ語千歳方言辞書の編纂、各地で講演会なども多数行い、アイヌ語教育とアイヌ語復興運動に欠かせない存在となっている。

また、2018 年度は「親と子のアイヌ語学習」で講師を務める瀧口夕美氏が上級講座の助手も務めている。瀧口氏については「親と子のアイヌ語学習」で後述する。

４．１．２　教材・授業について

センターで行われるアイヌ語の授業の内容は各講師に任されており、上級講座の場合は講師の中川氏のオリジナルプリントにより授業が行われている。筆者が見学に行った 2018 年 6 月の授業の参加者は 15 名で、全員女性であった。授業の最初にアイヌ語で講師と受講者が授業開始の挨拶をし、その後プリントを使って静内で採録された「onne paskur（年寄りカラス）」という問答形式の口承文芸の解説と、読む練習が行われた。「onne paskur」には「酒を醸す」という意味の文が出て来るが、講師が昔の北海道での酒作りの話や、カムイノミ[2]で米と麹だけを捧げ、「材料を送るからカムイモシリ[3]でお酒を作ってください」と言っていたこともあるなどの話を、受講者たちは興味深そうに聞いていた。

この日は 50 分ほど「onne paskur」をやった後、1934 年にマンロー氏[4]が考古学調査のために釧路に行って撮影したという映像を鑑賞した。映像には当時の釧路のコタン[5]の様子や、アイヌの人たちが踊っている様子が映っており、その中に「emus rimse（剣の舞）」があった。「emus rimse」は現在、アイヌの歌や踊りを披露するイベント、北海道白老町のアイヌ民族博物館（2020 年に国立アイ

---

[2] 神に祈る儀式
[3] 神々の暮らす世界
[4] ニール・ゴードン・マンロー（1863―1942）。スコットランド出身の医師で、1891 年に来日し医療活動の傍ら考古学や人類学の調査を行った。
[5] アイヌの集落のこと

ヌ民族博物館としてリニューアルするため現在閉館中）などでも頻繁に踊られる踊りであるが、講師によるとこれは元々道東の踊りで、講師が昔フィールドワークに訪れていた平取町や白老町では踊られていなかったという。この話に受講者たちはとても驚いた様子で、食い入るように映像を見ていた。

その後 10 分程休憩を挟んで、授業の後半は進行を助手の瀧口氏にバトンタッチしてプリントを使った文法の勉強が始まった。この日は「or ta（～に）」「ari（～で）「tura（～と）」などの助詞を習う日で、プリントでこれらの使い方の説明をし、練習問題を解いた後、くじ引きをして引いた紙に書いてある助詞を使って作文をするというゲームが行われた。

上級講座は終始受講者がリラックスしたような雰囲気で笑いに溢れる授業であった。このゲームの最中は特に笑い声が溢れ、間違った文章を作ってしまった受講者には他の受講者が自発的に誤りを教えてあげるなどの様子も見られ、全員で楽しみ、助け合いながら学習している様子が非常に印象的であった。

４．１．３　講師の話

講師の中川氏は大学のアイヌ語授業とセンターでアイヌ向けに行う授業では目的が違うと述べている（中川 2010：112-113)。センターの場合は色々なものを紹介し、自分たちが口にしたり、歌ったりということを通じて日常の中で遊んだりできるようにすること、「日常の中で使えるもの」を提供すること、そして何よりアイヌ同士が集まり、アイヌ語を公に口に出すことができ、アイヌ語に触れられ、同じ意志を持った者同士が交流できる「場」を提供することが目的だという。受講者が講座に通い続けたいと思うような、楽しい授業になるよう、毎回工夫も凝らしている。また、「アイヌ人自身がアイヌ人にアイヌ語を教えるのが一番自然な形」で、「アイヌの優秀な講師を育てたい」とも話しており、助手の瀧口氏の活躍や受講者同士の教え合いの様子を見ると、まだまだ数は少ないかもしれないが、徐々にその目的は達成されつつあるように思える。

４．１．４　小結

首都圏でアイヌ語を学べる場所が限られている中で、３つも講座を実施しているセンターの存在は、首都圏のアイヌ語教育に寄与するところが大きい。

しかし中川 (1999) が指摘するように、ⅰ．首都圏でアイヌ語を学ぶにはセンターに通うしかなく、受講者の移動の負担を考えると頻繁には講座を行えないこと、ⅱ．首都圏に暮らすアイヌのルーツは様々で、どの地域の方言を中心に学習すれば良いのか決めるのが難しいこと、ⅲ．首都圏（本州）に暮らす人々は北海道在住者に比べアイヌ関連のイベントや自然的社会的環境から切り離されていること、のような問題点もある。

受講者のレベルは個人によって様々であるのに、アイヌの大人を対象とする講座が「上級講座」し

かないのも問題である。レベルに合わせて講座数を増やすとなれば講師の確保が必要であるが、外部のアイヌ語研究者に講師を依頼するだけでなく、指導者育成事業の修了生を積極的に講師として採用することもできる。仮にレベルに合わせた講座が実現するならば、入門、初級、中級、上級と通い続け、上級を修了した受講者に講師役になってもらう方法もある。一人で教える負担が大きければ、複数人で講師をやるのも良い。上級講座を修了しても、教えるためにさらに勉強の機会が生じ、個人のステップアップにもなるのではないか。受講者にとっても、講座出身の講師がひとつのロールモデルとなり、アイヌ語学習の目標や動機付けにも繋がるだろう。

ⅱの問題点に関して、財団がアイヌ語の各方言のテキストを作成しており、北海道内のアイヌ語教室では原則的にその地域の方言が教えられることが一般的であるが、田村雅史（2011）が指摘するように、北海道内であっても札幌のような都市部では受講者の出身地域がそれぞれ異なるため、どの地域の方言を教えるかが首都圏同様に問題になり得る。また小松（2000）の様似アイヌ語教室などは、様似方言の特殊性と学習に利用できる資料の乏しさから、そもそも地元の方言を学びたくても学ぶのが非常に困難であるという現状もある。

中川氏は「方言差があるのであれば、どの地域の言葉でも聞いてわかる程度に習得すれば良い」（北原 2012：279）との考えから、上級講座でも各方言での言い方を説明して授業をしている。関東ウタリ会の「母と子のアイヌ語教室」でアイヌ語を学び始め、現在は北海道大学アイヌ・先住民研究センターの准教授を務める北原次郎太氏も北原（2012：279）で「どの地域の言葉でも聞いてわかる程度に習得する」方法が現状では最善の方法ではないかと述べている。

ⅲの問題点の一つの解決策として、上級講座では先述したように映像資料を積極的に活用している。アイヌ無形文化伝承保存会の作成している映像を中心に、そこに出てくるアイヌ語について講師が補足説明を加え、映像から関連する話を展開して授業を行っており（中川 1999：60）、筆者が上級講座の見学に行った際も受講者たちは熱心に映像を見ていた。

４．２　親と子のアイヌ語学習

財団は「親と子のアイヌ語学習（以下「親子講座」）を「アイヌ民族の親子を対象とし、アイヌ語話者及びアイヌ語研究者の協力を得て、アイヌ語の振興及びアイヌの伝統や文化の保存を図ろうとする事業」としている。「親子講座」は「上級講座」に遅れて始まった事業で、現在講座の助手を務める今井とわ氏も小学１年生から大人に混じって上級講座に通い、その後「親子講座」が始まったため、それ以降は高校生になるまで「親子講座」に通っていたという。

2018 年の「親子講座」は毎月２回土曜日の 12 時半から 14 時半までセンターで行われている。「親子講座」の参加者は親子３組までで、４歳から中学生までが対象という。今年は親子２組と聴講生として講師の瀧口夕美氏のお子さんが受講している。前年度は５歳の子どもと中学生が通っていたと言

い、ひと口に「子ども」と言ってもかなりの年齢差がある。

４．２．１　講師について

「親子講座」の講師は「上級講座」で助手を務める瀧口夕美氏である。「親子講座」開始当時はウィリアム・ディンエバソン氏が講師を務め、瀧口氏はその助手を務めていた。その後 2013 年からは成田英敏氏が講師となり、成田氏が３年講師を務めた後、2016 年からは瀧口氏が講師となった。

瀧口氏は北海道阿寒町（現在は釧路市と合併）の出身で、進学のために上京した。2004 年頃から「上級講座」に通い、2010 年と 2011 年には財団の指導者育成事業にも参加している。

現在「親子講座」の助手を務める今井とわ氏は静岡県在住の高校生である。今井氏は小学１年生から上級講座に通い始めたが、それ以前にも祖母に連れられてセンターを訪れており、アイヌ語を習い始める頃には自分はアイヌであるという自覚が出来上がっていたという。今井氏はその後「親子講座」が新設されてからは「親子講座」でアイヌ語を学び、高校生になってからまた上級講座に通っている。高校２年生の時にセンターの職員から「親子講座」の助手になることを打診され、教える立場でアイヌ語に関わることは貴重な経験だと思い助手を引き受けたという。「親子講座」出身者が教える立場となって現場に戻って来るのは今井氏が初である。

４．２．２　教材・授業について

「親子講座」は子どもが対象であり、絵を描く、ゲームをする、といった「楽しむ」ことがメインの授業になっている。2018 年の受講者は親子２組６人と聴講生１人（講師の子ども）で、小学校低学年が１人いる以外は未就学児である。

筆者が見学に行った 2018 年６月の授業では、天気に関する単語の学習から始まった。前回の授業で子どもたちが描いた雨や雪など天気に関する絵を見せながら、講師が「これはアイヌ語で何？」と尋ねながら子どもたちにアイヌ語で言わせる。そしてホワイトボードにひらがなで「よい　ぴりか」「あめ　あぷと」のように日本語とアイヌ語を対応させて書き、発音させる。小学生は単語もよく覚えており積極的に発言するが、未就学児たちは単語を忘れたり、集中力が切れて授業と関係ないことを話したり、「絵を描きたい」と言い出したりで、この日はまた天気に関する絵を描くことになった。しかし、ただのお絵かきで終わるわけではなく、子どもたちが描いた絵はすぐさま授業の道具となった。講師陣がホワイトボードや窓など教室の至る所に絵を貼り付け、子どもは一人ずつマタンプシ[6]で目隠しをして親や他の子どもたちに連れられて絵の前に立ち、マタンプシを外して目の前の絵についてアイヌ語で言う（例えば目の前の絵が雪の絵なら、子どもは雪を意味する「ウパシ」と言う。単語が分からなければホワイトボードに書かれている単語を見たり、周りの子どもや大人が助ける）、と

[6] 鉢巻きのこと

いう絵を利用した即興のゲームになった。

ひとつのゲームが終わると休憩を挟む。この日は休憩後に色のついたブロックを使って色の名前を学習した。その場にない色について、「〇〇色は何て言うの？」と質問が出ると、難しいものに関しては講師が辞書で調べたり、親の方から「〇〇って言うんじゃなかったっけ」のように意見が飛び出したりする。

最後は動物の名前を覚えるゲームを行った。磁石を取り付けた動物の写真を床に並べ、子どもたちは磁石をぶら下げた「釣り竿」で動物を「釣る」。その動物の名前がアイヌ語で言えれば自分のものになる、というゲームである。小学生の子どもは次々に動物の名前を答えて獲物を獲得し、未就学児の子どもたちは釣り自体に夢中になっていた。

４．２．３　講師の話

現場で感じる問題点について尋ねると、助手の今井氏は、子どもに教えることの難しさと、「親子講座」に通う子どもの間に年齢差があることから、年齢別クラスが必要だと語ってくれた。幼稚園児でもできるゲームを授業に取り入れると、小学生にとっては簡単すぎてつまらなく、その逆で小学生のレベルに合わせた授業をすると、幼稚園児には難しすぎる。現在は「親子講座」に中学生は在籍していないが、「親子講座」は４歳から中学生までを対象とした講座であり、もし４歳児と中学生が同時期に在籍するとしたら、全員が楽しく学べる授業を進行するのは非常に困難だろう。

また、現在「親子講座」は１年単位で開講されているため、１年で通うのを辞めてしまう子もいれば、毎年通っている子もおり、新年度に新しく入って来る子もいる。受講する子どものレベルに関わらず一クラスしかないため、毎年通っている子は新しい受講者が入って来るたびに、入門の授業を何度も受けることになってしまう。習熟レベルの違う受講者が同じクラスで学ぶと、初学者にレベルを合わせるようになってしまうため、習熟度の高い受講者のやる気を削いでしまう可能性がある。

以上の点から今井氏は複数のクラスが必要だと話し、そうすれば授業内容も充実し、学習を発展させることができるのではないか、と話してくれた。現在はクラスが一つしかなく、開講も月に２回だけで講座でできる内容にも限りがあるので、「教室に通うことで少しでもアイヌ語やアイヌに興味を持ってくれればいいなくらいの気持ち」で授業を行っているという。

４．２．４　小結

講座を見学した筆者も、受講者である子どもたちの年齢差と習熟度の差を感じた。クラスの増設が難しければ、現状では無理に全員で同じ内容を学習するのではなく、教室内で講師と助手が手分けをして子どもたちの年齢・習熟度に合わせた授業をそれぞれ展開しても良いのではないかと思った。また、授業で行うゲームの豊富さとユニークさは非常に感心したが、子どもたちはゲームをすることに

夢中でアイヌ語は二の次になっている様子も見られた。子どもを対象とした授業ではゲームを取り入れることは非常に有効であると思うが、よりアイヌ語に触れるようにするためには、幼児・小学生向けの英会話教室などの事例を参考に、工夫の余地はあるだろう。

４．３　アイヌ語入門講座

センターでのアイヌ語入門講座は 2016 年から始まった比較的新しい事業であり、筆者は 2016 年度の受講生である。財団は入門講座を「アイヌ語を学習、習得及び継承しようとする意欲のある者を対象としたアイヌ語入門講座を実施し、アイヌ語伝承者のさらなる掘り起こしと裾野の拡大を図ろうとする事業」としている。センターの入門講座は毎年５月から３月までの第２・第４水曜日、16 時から 18 時まで行われており、定員は 30 名程度で、一般人を対象としている。筆者は 2017 年の 10 月に授業を見学させてもらった。

４．３．１　講師について

講師は 2016 年度から 2018 年現在まで成田英敏氏が担当している。成田氏は以前「親と子のアイヌ語学習」や PARC 自由学校の講師を務めていた経験もあり、後述する埼玉県の慶應義塾志木高等学校でもアイヌ語を教えている。東京都出身の成田氏は漫画家で、1986 年の中曽根康弘首相（当時）の「単一民族発言[7]」に対してアイヌから抗議の声が上がったとのニュースを聞き、初めてアイヌの存在を意識するようになったという（成田 2015：191）。その後アイヌをテーマに漫画を描こうと北海道を旅してまわり、博物館を見学したりアイヌの方々から話を聞くうちにますますアイヌ文化に興味を持ち、アイヌ語も勉強するようになったという。当初は独学で学んでいたが、その後、アイヌ語学習サークル「銀の滴講読会」や「パルンペ」で勉強するようになった。「銀の滴講読会」のメンバーで慶應義塾志木高等学校でアイヌ語を教えていた国語教師が学校を定年退職することになり、その後任として慶應義塾志木高等学校でアイヌ語を教えるようになったのが、アイヌ語講師としての最初の仕事だという。

４．３．２　教材・授業について

入門講座では『アイヌ神謡集』の著者・知里幸恵の出身地である幌別方言を学習している。教材は成田氏が作成したアイヌ語文法のオリジナルプリントを毎回配布しており、内容は中川裕氏のアイヌ語講義の教材を参考にするなどして作成しているという。授業の前半はプリントを使って文法を学び、受講者全員で例文を発音したり、その日学んだ文法を使って作文をしたりする。授業の後半は成田氏

---

[7] 中曽根首相（当時）が演説でアメリカのマイノリティに対して差別的発言をし、その謝罪会見で今度は「日本は単一民族である」と発言して日本国内で問題になった。

が録画したアイヌに関するドキュメンタリー番組などを鑑賞し、アイヌ文化をはじめとして、アイヌを取り巻く歴史や社会環境について学ぶ時間となっている。

筆者が見学に行った日は、プリントを使って前回の授業の復習をした後、その日のテーマであるアイヌ語名詞の概念形・所属形を学んだ。日本語にはない概念に受講者は苦戦しながらも、プリントを使って例文を発音したり作文したりした。文法の授業が終わり 10 分休憩を挟んだ後、旭川でアイヌ語を学ぶアイヌの女性のドキュメンタリー番組を鑑賞した。彼女のことが紹介された新聞記事のコピーと、彼女のアイヌ語の先生である男性の記事のコピーが配布され、講師から人物についての紹介があった後、ドキュメンタリーが流された。受講者は真剣に映像を見ており、ドキュメンタリー鑑賞後に講師の補足説明や受講者からの質問があった後、この日の授業は終了となった。

４．３．３　講師の話

成田氏はアイヌ語を勉強してきた中で、アイヌ文化振興法の施行により東京にセンターができたことが一番の大きな変化だと語る。それまで自身が参加していたアイヌ語学習サークルは使用料を払って他の施設を借りていたが、センターができてからはセンターを無料で利用できるようになった。センターには資料も揃っているため、学習環境としてはとても良い。しかし、センターは公共の施設であるため誰でも利用できることができる一方で、言い換えれば好ましくない人物が利用することもある。成田氏が「親子講座」の講師を務めていた時に、授業中に一人の男性が勝手に教室に入ってきたことがあった。成田氏の前任講師の時には「親子講座」の子どもの写真を無断で撮ろうとした者もいたという。

入門講座は月２回の授業で、語学を習得するには少ないと言わざるを得ない。そのため成田氏は、アイヌに関する歴史や文化も知ってもらおうと、授業の後半をアイヌに関する映像資料を見たり音声資料を聞く時間としている。教材については、「親子講座」の講師を務めた経験から、子ども向け知育教材が不足していると話す。今は道内も含めた各「親子講座」の講師が教材を準備しているが、各地の子ども向け講座で使えるように、知育教材の開発が必要だという。

成田氏が今後望むこととしては、学習者が増えること、アイヌ語講師が集まって研修会や報告会が行われること、人材を育てること、が挙がった。学習者の拡大は人材育成に繋がることである。学習者を増やすことで、その中から将来アイヌ語を教えられる人材、アイヌ語を教えたいと思う人材が出て来るかもしれない。アイヌ語講師同士の研修会や報告会は、各教室でどのような授業を行っているのか、経験談を共有することで講師としてのスキルアップに繋がるものである。

４．３．４　小結

筆者も 2016 年度の入門講座を受講していた際、アイヌ語を語学として学べる場としてセンターが

あることがとてもありがたかった。授業では後半の映像を見る時間がとても楽しみだった。アイヌ文化保存会の映像などは手に入りにくいし、そもそも当時は映像の存在も知らなかったため非常に興味深かった。テレビで放送されたドキュメンタリー番組なども放送が終わってからでは視聴困難なので、それらの映像が見られたこともとても貴重な経験となった。

入門講座では初回に自己紹介があり、受講者たちから講座に通い始めた動機などが語られる。入門講座に通う受講生の動機は非常に多様である。成田氏の授業のように文法と歴史や文化の授業を同時に行うことは、多様な受講者のニーズに応えられるだけでなく、当初語学としてのアイヌ語にしか興味のなかった筆者のような受講者に、言葉だけでないアイヌの世界の奥深さに気付かせてくれる良いきっかけになっている。

成田氏の話の中で子ども向け教材の不足に関する話があったが、子ども向け教材としては既に財団が製作した各方言の教科書やかるた、すごろくなどがあるほか、千葉大学が製作したカードゲームなどもある。しかしセンターで行われる「親子講座」に限っていえば１回の授業時間が２時間と長く、財団の教科書だけを利用するのでは間が持たない。財団の教科書は１課約２ページで構成されており、１ページは例文、もう１ページは簡単な解説と簡単な練習問題が載っているだけで、講師の補充説明や補充問題が不可欠である。子ども向けの授業では必要不可欠なゲームも、現状ではかるたやすごろくなど種類が少なく、２時間の授業を月に２回、１年間やるとなると、同じゲームを何度もすることになってしまい、やはり子どもたちは飽きてしまう。子ども向け教材はよりたくさん必要である。その点でも、講師同士の研修会などがあれば、各教室でどのような工夫が行われているか情報交換もできる。

講師同士の研修会は、北海道アイヌ協会[8]が行っていたアイヌ語教室では 1991 年に「連絡協議会」が結成され、北海道内のアイヌ語教室の横の繋がりが作られていたというが（本田 1997：154-155）、財団のアイヌ語講座では実施されていない。類似の取り組みとして北海道大学が「アイヌ文化に関する研究の推進・連携等体制構築の検討事業」を発案し、2010 年に報告書をまとめている。これはアイヌ文化をテーマとした研究機関・研究者がどこにおり、どのような研究実績があるのかを明らかにし、また、研究資料等の所在を確認するためのもので、全国の大学、短期大学、高等専門学校、都道府県単位の教育委員会、北海道内の市町村単位の教育委員会、全国の博物館など、5,297 機関を対象に調査を行ったものである。しかしこれは「アイヌ文化」の研究者に焦点が当てられているため、アイヌ語講師の所在については明らかになっていない。アイヌ語講師に関してもこのような取り組みが行われることが望ましい。

アイヌ語入門講座は財団のホームページに受講生の募集が告知され、簡単に申し込むことができるが、上級講座と「親子講座」はホームページ上では詳細が公開されておらず、受講者はクチコミで講

[8] 公益社団法人北海道アイヌ協会のことで北海道居住のアイヌの組織である。

座の存在を知って申し込んでいるようである。首都圏のアイヌ団体に所属している者や、団体に所属している知り合いがいる者はそこから情報が得られるかもしれないが、横のつながりのない者、センターの存在を知らない者は、自力でアクセスしない限り、講座の存在を知る機会がない。潜在的学習者を失うのは残念なことである。首都圏に住むアイヌが「そんな講座があるなら自分も通ってみよう」と思えるように、プロモーションの方法も模索すべきだろう。

以上のような問題点はありつつも、アイヌ同士がアイヌ語に触れ、仲間と交流できる「場」としてのセンターの講座の存在は大きい。センターができる前の首都圏アイヌの要望の一つに、「交流施設を作ること」が挙げられていた（大谷 1997：66）。首都圏のアイヌ団体が会員を集めてアイヌ文化の学習をしようと思っても、東京は地価が高く、会費だけで場所を確保するのは困難で、公的機関に場所を借りるのは予約が必要、借りられる回数が決まっている、などの制限があった。センターが設立され、設立と同時に講座が開かれ現在まで続いているのは、アイヌ文化振興法の一つの成果であり、今後も講座が継続され発展していくことを祈るばかりである。

５．４年制大学におけるアイヌ語授業

首都圏の大学で本格的な語学の授業としてアイヌ語を始めたのは早稲田大学である（井筒 2007：62）。早稲田大学のアイヌ語の授業は、早稲田大学語学教育研究所の田村すゞ子氏によって 1975 年から始まった。アイヌの子弟に伝統文化などを教えてもらいながらアイヌ語の基礎を学ぶ授業と、昔話などを学ぶ勉強会も開かれていた。田村氏の授業ではテストの代わりに「アイヌ語祭」と称して学生たちにアイヌ語による寸劇や口承文芸、歌を披露させ、出演した学生に単位を与えていたという（田村 2013：195）。田村氏は早稲田大学の他に東京大学、学習院大学でも通年でアイヌ語の授業を受け持っていたことがある。早稲田大学では現在、「アイヌ語（入門）」、「アイヌ語（初級）」、「アイヌ語＜言語文化＞（入門）」、「アイヌ語＜言語文化＞（初級）」が開講されているほか、集中講義として「アイヌ語＜口承文芸＞（入門）と「アイヌ語＜口承文芸＞（初級）」が開講されている。担当は志賀雪湖氏、児島恭子氏、奥田統己氏の３人で分担している。また、東京大学では現在アンナ・ブガエワ氏が「言語学特殊講義」でアイヌ語を教えている。

早稲田大学に遅れて 1985 年からは千葉大学でもアイヌ語の授業が始まった。千葉大学の授業は現在まで続いている。

以下では千葉大学、首都大学東京、東京外国語大学、早稲田大学、立正大学におけるアイヌ語授業について報告する。

５．１　千葉大学のアイヌ語教育の変遷

千葉大学では中川裕氏が赴任した 1985 年から、文学部の専門科目としてアイヌ語の授業が始まっ

た。その後、1991 年に当時の文部省による「大学設置基準の大綱化」で専門科目と一般教育科目の垣根が取り払われ、一般教育科目の教員が在籍する「教養部」が全国の大学で廃止された。それを受けて千葉大学では 1994 年に外国語センターが設立され、そのセンター長に金子亨氏が就任した。金子氏は語学の授業をアイヌ語を含む 17 種類に拡大し、文学部の授業とは別に普遍教育（一般教育）の語学科目としてもアイヌ語の授業が始まることとなった。アイヌ語が普遍教育に組み込まれてから 1998 年までは初級を中川氏、中級を志賀雪湖氏が受け持ち、1999 年からは担当を交互に変えて 2006 年まで続いた。志賀氏が中級を担当していた時は静内方言の文法を教えており、『アコロイタク』という北海道ウタリ協会（現：北海道アイヌ協会）が製作した各方言を盛り込んだ教科書の静内方言版を作成し、プリントを配布して使ったりしていたという。中川氏の『エクスプレスアイヌ語』というアイヌ語学習本が出版されてからは、『エクスプレス』を教科書に指定していた。授業では文法解説、作文、文化に関する解説のため 15 分程の映像を鑑賞することもあった。しかし、2006 年を境に千葉大学が非常勤講師の予算を大幅に削減したため、2007 年からは普遍教育でのアイヌ語が廃止されてしまった。

文学部でのアイヌ語授業はこれまで実に多彩な講師陣、ゲストを迎えて開講されてきた。たとえば１セメスターだけでも授業を担当したことのある人物には北海道大学の佐々木利和氏、東京八重洲のアイヌ文化交流センターの木原仁美氏、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの丹菊逸治氏がおり、普遍教育の志賀雪湖氏が文学部の授業を担当していたこともある。集中講義では札幌大学の本田優子氏、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原次郎太氏、『エクスプレスアイヌ語』や『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』の著者である中本ムツ子氏が講師を務めたことがある。授業のゲストとしては北海道内各地の出身で首都圏で活躍するアイヌの方々が登場し、これだけ多様で豪華な人物たちが教壇に立ったのは千葉大学だけではないかと思われる。

2007 年から現在の千葉大学では文学部でのみ授業が行われており、通年で中川氏による「アイヌ語」と「アイヌ語学演習」が開講されているほか、学外からの参加者も含めたアイヌ語勉強会が週に１度開かれている。

５．１．１　授業について

①「アイヌ語」

この授業はアイヌ語の基礎を学び、アイヌの文化や歴史に関する基礎的知識を身につけることを目標としている。2018 年度は毎週水曜の２限（10 時半～12 時）に行われ、受講生は 30 人程度である。

授業では「上級講座」同様に中川氏によるオリジナルプリントが配られるが、授業の目標が「アイヌ語の基礎とアイヌの文化・歴史の基礎的知識を身につけること」であるため、内容は文法事項から文化、歴史に関することまで幅広い。

たとえばある日の授業では、言葉遊びとして鳥の聞きなしを学んだ。まずアイヌ語の聞きなしと日本語訳が書かれたプリントを見ながらアイヌ語を発音し、文法事項の説明があった後に実際の鳥の鳴き声を流して何の鳥かを学生に当てさせる。その後、なぜこのような聞きなしになったのか、その背景の解説がある。またある時は、人称接辞とアクセントなど、専門的で難しい文法を学習したりもするが、授業では毎回映像や写真をスクリーンに映したり、歌や口承文芸などを聞く時間があり、まさしく文法・文化・歴史を満遍なく学べる構成になっている。ある時は財団が作製したアイヌ語かるたを使って、学生同士がペアになり、物が描かれたかるたの中から好きなものを選んで相手に渡す・相手からもらうというシチュエーションでの会話練習が行われたりもした。授業中よく漫画『ゴールデンカムイ』の１コマをスクリーンに映しながら、作中に現れたアイヌ語や道具などの解説があり、また中川氏はゴールデンカムイのアイヌ語監修を務めているため、監修時のちょっとした裏話なども話題にのぼることがあり、学生たちの人気を集めている。

②「アイヌ語学演習」

アイヌ語学演習は「アイヌ語」を既に受講した学部２・３年生が対象の授業である。この授業では短い物語を聞き取って理解できる程度に文法を学び、音声や映像資料を活用してアイヌの伝統的世界観や生活文化についても学ぶ。2018 年度は毎週水曜の３限（12 時 50 分～14 時 20 分）に開講されており、受講生は 20 名程度である。

教材はやはり毎回プリントが配られる。内容は主に口承文芸を文字に起こしたものである。ローマ字で書かれた口承文芸を、音声を聞いて実際に発音し、単語を調べながら日本語に訳していく。授業では中川氏が実際に採録した音声を聞くこともあれば、財団が製作した視聴覚資料でインターネット上でも公開されている「オルシペスウォプ」を使うこともある。また、口承文芸をただ読んで訳すだけでなく、時には写真や映像を見て文化について学ぶこともある。たとえば口承文芸の中に「ござ編み」という単語が出てくれば、ござ編みに使われる植物の写真を見て、実際にござ編みをしている映像を見たりもする。

現在活躍するアイヌの方の取り組みや、北海道内でのアイヌに関する動きを授業で取り上げることもある。たとえば現代音楽とアイヌの伝統音楽や楽器を融合させた音楽ユニット IMERUAT や、アイヌの伝統的歌唱法で歌うマレウレウなどの楽曲を聞くこともあれば、北海道の道南バスが一部の区間で車内アナウンスにアイヌ語を導入した話や、北海道観光振興機構が『ゴールデンカムイ』を北海道観光に活用することに決めたことなど、授業では常に最新のトピックスが話題にのぼる。

「アイヌ語」も同様だが、「アイヌ語学演習」の授業では初回にアイヌやアイヌ語に関する参考書籍や資料、センターの紹介などがあり、首都圏でアイヌに関するイベントなどがあればその都度授業で紹介されるため、より深くアイヌ語やアイヌ文化を知りたい学生には授業自体が良い情報源になっ

ている。「アイヌ語学演習」は学生たちから積極的に質問が飛び交う非常に濃度の濃い授業である。

③アイヌ語勉強会

アイヌ語勉強会は毎週水曜日の夕方に、中川氏と学生有志、学外からの参加者によって行われている自主勉強会である。常時 10 名程が参加している。内容は主に未刊行の口承文芸が採録された当時のノートの解読と、物語の内容の日本語訳である。毎回担当者がノートを解読しアイヌ語をローマ字表記して日本語訳をつけたものを配布し、参加者全員で検討を行う。学生以外の参加者は千葉大学の修了生や外部のアイヌ語学習サークルの参加者、学外の研究者など多様である。学生は大学院生が主だが、文学部のアイヌ語の授業を受講し、さらに深く勉強するために参加する学部生もいる。内容は文学部の授業とは全く異なり高度で難しいが、首都圏でこのような勉強会が開けるのは千葉大学だけではないだろうか。

５．２　首都大学東京のアイヌ関連授業

首都大学東京では「教育学特殊講義」という科目でアイヌに関する講義が行われている。アイヌ語に特化した講義ではないが、アイヌを主要テーマとして扱う講義は首都圏では珍しい。講義を担当するのは上野昌之氏である。上野氏の講義はアイヌの歴史と文化の基礎を学び、民族文化の意義と教育が持つ意味について考え、多文化社会の課題について考察する授業となっている。

５．２．１　講師について

上野氏は教育学が専門で、高校で地歴・公民の教員をしていたこともある人物である。高校での授業をきっかけに、アイヌか琉球について研究しようと考えていた上野氏は、実際に北海道と沖縄に足を運び、現地の人から話を聞くなどしていた。その頃中曽根首相（当時）の「単一民族発言」が話題になっており、アイヌに対する関心を深めていった上野氏は、単一民族発言に抗議する関東ウタリ会などの集会にも参加した。その時から本格的にアイヌ研究に取り組むようになり、早稲田大学で田村すゞ子氏からアイヌ語を教わった。現在上野氏は首都大学東京のほかに、和光大学の「日本における民族関係」という講義や、市民大学講座でもアイヌに関する授業を行っている。

５．２．２　授業について

筆者は 2017 年 10 月に首都大学東京の「教育学特殊講義」を見学させてもらった。上野氏によると受講生は多くはないが、毎年留学生の受講生もいるという。2017 年後期の受講生は大学院生を含む５名で、留学生も１名いた。教材は上野氏が毎回プリントを用意する。筆者が見学に行った日は授業の冒頭で「pon seta utar（子犬たち）」という神謡のテープを流し、プリントを見ながら全員で歌う

ように語った。後期の講義が終わるまでに歌えるようにするのが目標だという。神謡の中に出てくる単語や、アイヌ語の発音、表記法などについての解説もあり、その後、その日のテーマである口承文芸の本格的な話に入った。アイヌの口承文芸の種類とそれぞれの特徴について、プリントを使って詳しい解説があった後、実際にアイヌの方が英雄叙事詩を語る映像を鑑賞した。上野氏のプリントは非常に詳しくかつ分かりやすくまとめられており、高校教師だったという上野氏の経歴の影響が垣間見えた気がした。その後インターネットで公開されている財団が製作したアイヌ語のアニメをいくつか鑑賞し、最後に知里幸恵の『アイヌ神謡集』の紹介があり、この日の授業は終わった。

５．２．３　小結

上野氏は毎年初回の授業で学生にどの程度アイヌのことを知っているかアンケートをとるが、大部分の学生がほとんど何も知らない状態だという。上野氏はアイヌのことを知らない人があまりにも多く、そういった人たちや、誤った知識からアイヌのことを誤解している人たちに正しい知識を伝え、アイヌの理解者、応援者を一人でも多く増やしたいとの思いから教壇に立っていると話す。「子どもの頃に肯定的なイメージで受け取ったものは大人になってからも覆らない」という考えから、特に学校教育の中でアイヌに関する教育を積極的に行うことを提唱している。現在は学校教育の中でアイヌに関して学ぶのは主に社会科の授業であり、他に総合的な学習の時間を使って体験的な学習を行う場合もあるが、北海道内でさえ、「アイヌ民族の学習は必要だと思うが方法が分からない、安易に取り組めない、時間がない」という意見が目立ち（伊藤 2013）、教科書の記述に沿うだけで、そこから発展した授業はなかなか行われていない。次項で述べるように近年北海道内ではアイヌに関する学習を取り入れる高校が徐々に現れつつあるが、アイヌに関して教えられる教員がいないため外部講師を招いて授業せざるを得ない。今後、高校に限らずアイヌに関する学習を取り入れる学校が増えていくとすれば、上野氏のように学校教育の現場の事情を知る研究者は貴重な存在である。

５．３　東京外国語大学のアイヌ語授業

５．３．１講師について

東京外国語大学でアイヌ語の講師を務めるのは、過去に千葉大学でもアイヌ語の授業を担当していた志賀雪湖氏である。志賀氏は現在東京外国語大学のほかにも、早稲田大学、立正大学、ディラ国際語学アカデミー、財団の指導者育成時事業でアイヌ語講師を務めている。

志賀氏は埼玉大学の学生だった時に、同級生の姉が東京外国語大学でアイヌ語に関する卒業論文を書いたと聞き、田村すゞ子氏を紹介してもらった。早稲田大学の北方言語・文化研究会にも所属し、田村氏からアイヌ語を教わりながら、同時に北海道静内町の織田ステノ氏、葛野辰次郎氏からもアイヌ語を教わった。当時大学院生だった中川裕氏の勉強会にも加わり、学生だけのアイヌ語合宿にも参

加していたという。

５．３．２　授業について

東京外国語大学の授業は見学が叶わなかったため、講師の志賀氏に普段どのような授業を行なっているのかアンケートを行なった。志賀氏から回答を得たアンケートの内容を以下に記す。

志賀氏は当初大学院の授業を担当しており、授業内容はその年ごとに言語、文化、文学などとテーマを変えていた。言語や文化をテーマに授業をする時はプリントを作成し、文学がテーマの時は中川裕氏の『アイヌの物語世界』を教科書に指定した。音声学の教員からアイヌ語の音声を学生たちにたっぷり聞かせてほしいとの要望があり、どのテーマで授業を行う際も音声資料を使用している。使用するのは自分で採録した音声資料のほか、早稲田大学の音声資料、『萱野茂のアイヌ神話集大成』、『萱野茂のアイヌ語辞典』、『アイヌ伝統音楽』などである。

のちに学部に授業が開放されてからは、文法中心のプリントや練習問題を作成して使用していたが、中川裕氏の『ニューエクスプレスアイヌ語』が出版されて２年ほど経ってから『ニューエクスプレスアイヌ語』を教科書に指定した。準備運動と称して毎回授業の最初に院で使用していた音声資料も使用している。会話中心の授業の年もあれば、文法中心の年もある。

５．４　早稲田大学のアイヌ語授業

早稲田大学のアイヌ語授業を担当するのは先述の志賀雪湖氏である。以下、普段の授業についてのアンケートの回答内容を報告する。

早稲田大学では会話クラス、言語・文化クラス、口承文芸クラス、中級クラスを３人で担当している。志賀氏が担当する場合、会話クラスでは早稲田大学の音声資料『アイヌ語入門』から抜粋したプリントを配布し、会話をひたすら覚える。言語・文化クラスでは、言葉遊びやまじないの言葉、文化の理解に適したアイヌ語資料を暗唱することを中心に、文法も学んでいる。教材はプリントを配布し、文化を紹介するための映像資料も鑑賞する。口承文芸クラスでは、神謡、伝説、散文説話を部分的に暗唱することを前提に、実際に歌い、語る。物語のジャンルによって「私」を示す人称接辞が異なることや、音節数を数えるなど、語りに必要な文法も学ぶ。中級クラスは総合的に学ぶクラスと位置づけ、会話、文化理解のための映像資料、読解を柱に、受講生が特に学びたいテーマを扱っている。映像資料を鑑賞しての意見交換なども行う。

５．５　立正大学のアイヌ関連授業

立正大学では「マイノリティの文学」という科目でアイヌの口承文芸に関する講義が行なわれている。講師は志賀氏である。ごのような授業内容なのか、志賀氏から回答を得たアンケートの内容を以

下に報告する。

立正大学の授業では日本語に翻訳された資料をたくさん読むという方針だが、文化理解に必要な kamuy や inaw といった単語は覚えさせる。当初は散文説話とその内容に関する文化についてプリントを配布し、文化事項を説明したうえで各自に読ませていた。学生は段落ごとに内容をまとめ、毎回提出し、学生から寄せられた質問には翌週答える方式をとっていた。ここ３年ほどは知里幸恵の『アイヌ神謡集』を教科書に指定しており、いくつかの設問に学生が答え、提出する方式をとっている。他の学生が書いたコメントを知るのも勉強になると考え、時々コメントを紹介することもある。

５．６　小結（東京外国語大学、早稲田大学、立正大学の授業に関して）

志賀氏が非常に多彩な授業を受け持っているのは志賀氏の膨大な知識と力量によってなせる業である。それでも志賀氏は、自身は語学教師であるため、歴史など専門外のことは簡単な説明しかできず、学生たちが各専門の教員からしっかり学ぶ機会ができたら良いと話す。アイヌの歴史を学ぶ授業がないため、何らかの知識を得たいと言語文化のクラスにくる学生もいるといい、ニーズにあった授業が提供されていないことは明白である。また、学生たちが大学に入学する前にアイヌの歴史についてある程度学んでいる状態が理想だが、高校までの歴史教育ではそのレベルまでに至っていないと感じるという。志賀氏は教材不足も感じており、特に民具の写真を授業で使いたい時など、適当な写真がない、写真があっても小さくて細部が分からないなどして苦労しているという。

井筒（2007）のアイヌ語学習・教育用資料の電算化・集積・公開のためのプロジェクトはまさにこのような悩みを解決するものである。アイヌ語のテキストや音声資料だけでなく、写真や映像なども集積してリスト化し、必要な資料を必要な時に簡単に入手するシステムがあれば、教員だけでなく独学者にとっても大変便利である。井筒（2007）によれば海外の少数言語ではそういった情報ネットワークが構築され活用されている事例があるという。海外の事例を参考に、アイヌ語でもこのようなシステムが作られれば、アイヌ語の普及にも役立つはずである。

６．　高校におけるアイヌ語授業

高校でアイヌ語の授業が行われるのは北海道内でさえごく稀である。先駆的な例として釧路市の釧路明輝高校が 2009 年からアイヌ学をカリキュラムに導入した。釧路明輝高校では民間の非常勤講師の指導でアイヌ文化学習を行っており、アイヌ語の授業も行われている。最近の事例では、江別市にある立命館慶祥高校が 2018 年度より平取町立アイヌ文化博物館の関根健司氏を講師に招き、アイヌ語の授業を開始した。立命館慶祥高校は文部科学省の SGH[9]指定校でグローバル人材の育成に取り組

[9]将来国際社会で活躍できるグローバル・リーダーの育成を目的とした文部科学省のプログラムで、2015 年 6 月時点で全国に 112 校の指定校がある。指定校は各自グローバル・リーダー育成のための特色ある授業を展開している。

んでおり、そのプログラムの一環でアイヌ語の授業が取り入れられることになった。その他に、道立石狩翔陽高校が手話を一つの言語と位置づけ 2017 年度から「手話語」の授業を開始するなど、道内の高校では特色のある授業を開設する動きが見られ、今後アイヌ語を授業として開設する高校が増える可能性もある。以下では首都圏でおそらく唯一と言って良い慶應義塾志木高等学校のアイヌ語授業について報告する。

６．１　慶應義塾志木高等学校のアイヌ語授業

慶應義塾志木高等学校（以下「慶應志木高校」）は、1991 年から２年生の総合的な学習の時間で「ことばと文化」という授業が週に２時間行われており、生徒はアイヌ語を含む 24 言語の中から言語を選択して学習する。2016 年までは通年で 24 言語の授業が行われていたが、2017 年度からは 24 言語のうち 12 言語の授業を通年で行い、残りの 12 言語は前期と後期に６言語ずつ行われ、2017 年度のアイヌ語は後期（10 月～２月）に行われていた[10]。生徒は前期・後期で異なる言語を選択して学習している。「ことばと文化」は必修科目で、以前は生徒が自分の学びたい言語を自由に選択し、希望の言語の授業を受けることができたが、人気言語と不人気言語で生徒数に大きな偏りがあったため、数年前からは生徒に第４希望まで書かせ、学校側が調整してどの言語も生徒数が 14～15 人になるようにしている。また、「ことばと文化」とは別に週に１回「語学課外講座」が設けられ、これは２年生に限らず慶應志木高校の生徒なら誰でも受講できるもので、24 言語の中から好きな言語を学習することができる。「ことばと文化」と「語学課外講座」でアイヌ語を担当するのは、財団のアイヌ語入門講座講師も務める成田英敏氏である。

６．２　授業について

①「ことばと文化」

筆者は 2017 年度後期の「ことばと文化」のアイヌ語の授業を見学させてもらった。成田氏によると以前はアイヌ語を選択する生徒は少なかったが、先述のように学校側が生徒数を調整するようにしたため、現在のアイヌ語の授業には 15 人程の生徒がいる。授業は２コマ連続で行われ、財団のアイヌ語入門講座と同様に、前半は成田氏のオリジナルプリントを使った文法の授業、後半はアイヌに関するドキュメンタリー番組などを鑑賞する時間となっている。

筆者が見学した日は、まず前回の授業の復習として、アクセントについて講師の説明があり、開音節と閉音節の復習をした後、この日のメインの音素交替に入った。その後講師が「〇〇カムイ」というペンネームの漫画家や、著名人がいること、「カムイ」がアイヌ語であること、普通アイヌは子どもに「カムイ」という名前はつけないことを話すと、生徒たちは興味深そうだった。文法の学習が終

[10] 2018 年度のアイヌ語は通年（４月～２月）で行われているという。

わった後に、映像を鑑賞する。鑑賞する前に講師が映像に関する簡単な説明を行った。この日はアイヌ文化保存会によるカムイノミ[11]の映像であった。教室の前方に座っている生徒は熱心に映像を見ていた。その後、10 分間の休み時間を挟んで今度は北海道の地名に関する NHK の番組を鑑賞した。映像を見た後講師が補足説明を行い、地名でよく使われるアイヌ語の意味や、由来が諸説ある地名などを解説した。

②「語学課外講座」

語学課外講座は慶應志木高校の生徒であれば誰でも受講できるものである。2017 年度後期は７限に初級アイヌ語、８限に中級アイヌ語のクラスがあった。筆者はその両方を見学させてもらったが、自ら希望して受講している生徒たちということもあり、とても熱心に授業を受けていた。見学した日の初級アイヌ語の授業は「ことばと文化」の授業と同様に発音の練習から始まった。講師が閉音節の発音の仕方を説明し、生徒は声を出して発音を熱心に練習していた。閉音節のいくつかの単語を講師が黒板に書き、発音してみせ、黒板に書きだした単語の意味や使い方についての説明も行うと、生徒は熱心にメモをとっていた。文法の説明が終わった後は、アイヌ文化に関する映像を鑑賞する。筆者が見学した日は「ことばと文化」と同じく、アイヌ文化保存会のカムイノミの映像を見た。講師はカムイについて説明し、カムイという単語がすでに日本人にも聞き馴染みのある単語になっていることや、カムイとは何か、アイヌの世界観についても説明があった。

中級アイヌ語の授業では、前年度の語学課外講座でアイヌ語を受講していた生徒と、前の時間に行われた初級アイヌ語も受けている生徒の２人が受講生であった。中級アイヌ語で使用する教材も講師によるオリジナルプリントだが、初級アイヌ語に比べ説明が高度で、内容も多い。この日は声門閉鎖音の説明があった後、アイヌ語は濁音と清音を区別しないなど、発音に関する説明があり、その後アイヌの口承文芸を代表する「銀の滴」の冒頭部分を板書し、英雄叙事詩や神謡の韻律の基本ルールについて学んだ。文法を勉強した後はやはり映像鑑賞である。この日最初に見たのは、日本人の夫婦の間に生まれたがアイヌの夫婦のもとにもらわれアイヌとして育てられた男性に密着したドキュメンタリー番組であった。その後、千歳市の「カムイノミを復活させる会」のドキュメンタリー番組を見た。これは千歳市に暮らすアイヌの男性が、自分の町ではやらなくなってしまったカムイノミを復活させようと、仲間とともに奔走する話である。

６．３　小結

以上のように、慶應志木高校ではアイヌ語の授業を３つも開講している。これは道内の高校でも例がないことである。「ことばと文化」は必修科目であるため、人気言語を選択して抽選にもれてしま

[11] 神に祈りや感謝を伝える儀式。

った生徒がアイヌ語に流れてくることもあり、全員が初めからアイヌ語を学びたくて受講しているわけではないが、生徒たちに話を聞くと、「日本語の方言みたいなもので簡単だと思って受講したら難しくて驚いた」や「日本語と全然違った」などの意見が多く、それまでアイヌ語に全く興味のなかった生徒たちに少なからずインパクトを与えているようである。「語学課外講座」の生徒たちは志願して受講しているため授業態度も真面目で熱心に授業を聞いており、「北海道の地名に興味があってアイヌ語を選択した」や「日本史や民俗学が好きでアイヌにも興味を持つようになりアイヌ語を受講した」といった明確な動機から授業を選択していた。

生徒たちに今後の授業に望むことを尋ねると、「他の言語の授業のように会話を重点的にやりたい」、「アイヌの歴史をもっと詳しく教えてほしい」、「アイヌの宗教や世界観を扱ってほしい」等、様々な要望が出た。

慶應志木高校の生徒に限らず、アイヌ語学習者の学習動機は様々である。英語のような大言語であれば、会話をやりたい人は英会話スクールへ行き、文学を読みたい人は英文学のクラスを受講し、通訳になりたい人は通訳養成講座に通う、のように多様な道が既に用意されており、学習者は自分の目的に合わせて勉強する場所を選択することができる。しかしアイヌ語はまだまだ役割分担がされておらず、ほとんどの場合、アイヌ語研究者がアイヌ語、文化、歴史、すべてを満遍なく教えなくてはいけないのが現状である。アイヌ語を教えられる人材が少ない中で、多少アイヌ語を身につけた者ならマニュアル通りに授業を進行すれば誰でも教えられるような教材の開発が早急に望まれる。これまでアイヌ語教育に携わってきたすべての人の知見と、既に教授法の研究が進んでいる大言語を参考に、実現できるはずである。アイヌ語を教える人材を増やすには、人々が「アイヌ語を勉強したい」、「アイヌ語の先生になりたい」と思うように社会の中でのアイヌ語の威信を高めなければならない。現在建設中の国立アイヌ民族博物館が 2020 年に完成すれば、一時的にアイヌ語への関心は高まるだろう。アイヌ語を学びたいと思った人々がアイヌ語を学べる場所が、2020 年の日本にはいくつあるだろうか。少なくとも今あるアイヌ語学習の場は守り続けて行かなければならない。アイヌ語への関心を一時的なもので終わらせないための努力、2020 年以降もアイヌ語が注目され続けるようにする努力が必要である。

７．おわりに

本稿では首都圏におけるアイヌ語教育の現状について、いくつかの事例を紹介した。今回は過去に行われていた関東ウタリ会の母と子のアイヌ語教室や、東京大学のアイヌ語授業など、調査できなかったものあり、それらの調査は今後の課題とするところである。また、首都大学東京などの事例のように、講義名に「アイヌ」と入っていないために外部からは見えにくいが、アイヌに関する授業を行っている大学が首都圏にはまだ眠っている可能性もある。それらの発掘も今後の課題としたい。アイ

ヌ語教育に携わる者が現在どのような教育を行っているのか、情報を発信することによって、授業の質の向上や、現在講師の負担になっている教材の問題の改善、講師同士のネットワーク構築など、アイヌ語教育をとりまく状況の発展に繋がれば良い。

しかしアイヌ語教育に関する諸々の問題を解決する根本的方策は、社会の中でアイヌ語の威信を高めることである。札幌大学の本田優子氏が北海道議会での講演で「アイヌ語を北海道の公用語に」と訴え新聞記事に取り上げられたが、このように社会的影響力のある人物が積極的に発言し、どんどん国や行政に働きかけてほしい。社会的影響力のある人物だけでなく、アイヌ語に関わる一人一人が広告塔となり、アイヌ語を社会に発信していく必要もある。

【参考文献】

井筒勝信（2007）「アイヌ語学習・教育用資料の電算化・集積・公開を可能にする情報ネットワーク構築のための基礎研究」『へき地教育研究』62：61-71. 北海道教育大学

伊藤勝久（2013）「学校教育における『アイヌ民族の学習』の課題：多文化的視座からの整理」『環太平洋・アイヌ文化研究』10：19-30. 苫小牧駒澤大学環太平洋・アイヌ文化研究所

上野昌之（2004）「アイヌ語の復興と普及におけるメディア利用の取り組みについて：アイヌタイムズと FM 二風谷放送の事例を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 11：23-24. 早稲田大学

大谷洋一（1997）「道外に住むアイヌとして」『アイヌ文化の現在』41-73. 札幌学院大学

北原次郎太モコットゥナシ（2012）「aynu itah eyaycaakasno：tani an=kii pe・tani orowano an=kii kun pe（アイヌ語学習：現状と課題）」『ことばと社会』14：276-304. 三元社

小松和弘（2000）「様似アイヌ語教室の現状と課題：アイヌ語学習運動と学校教育を展望したうえで」『日本のバイリンガル教育』47-84. 明石書店

小山純子（2015）「アイヌの人々のメディア環境とアイヌ語学習」『調査と社会理論』33：125-140. 北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室

田村すゞ子（2013）『アイヌ語の世界』吉川弘文館

田村雅史（2011）「アイヌ語研究史から見たアイヌ語教室」『ことばと社会』13：245-252. 三元社

中川裕（1999）「アイヌ語の復興に関するアイヌ文化振興・研究推進機構の活動について」『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』15：54-63. 千葉大学大学院社会文化科学研究科

中川裕（2010）『アイヌ語のむこうに広がる世界』SURE

中川裕・中本ムツ子（2004）『CD エクスプレスアイヌ語』白水社

成田英敏（2015）「sisam utar aynuitak eyayhonokka katu ene an i an wa ene ku=yaynu i（和人がアイヌ語を学ぶということについて）」『ことばと社会』17：190-208. 三元社

北海道大学アイヌ・先住民研究センター（2010）『アイヌ文化に関する研究の推進・連携等体制構築の検討事業報告書』

本田優子（1997）「アイヌ語教室の子どもたち」『アイヌ文化の現在』147-187. 札幌学院大学

＜新聞記事＞

「『アイヌ語を公用語に』札大・本田教授、道議会で講演」北海道新聞、2018.02.21

【参考ウェブサイト】（いずれも 2018 年 9 月 14 日最終閲覧）

公益財団法人アイヌ民族財団　https://www.frpac.or.jp/index.html

首都大学東京　https://www.tmu.ac.jp/

千葉大学人文公共学府地域研究センター「アイヌ語児童教材」http://cas-chiba.net/japan/children.html

千葉大学文学部　http://www.l.chiba-u.ac.jp/applicants/teachers/hiroshi_nakagawa.html

ディラ国際語学アカデミー　http://www.dila.co.jp/index.html

東京大学　https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/index.html

東京外国語大学　http://www.tufs.ac.jp/

PARC 自由学校　http://www.parcfs.org/

北海道石狩翔陽高校　http://www.ishikarishoyo.hokkaido-c.ed.jp/

文部科学省ＳＧＨ　http://www.sghc.jp/

立正大学　http://www.ris.ac.jp/

立命館慶祥高校　http://www.spc.ritsumei.ac.jp/

和光大学　https://www.wako.ac.jp/

早稲田大学　https://www.waseda.jp/top/

（わたなべ　かおり・千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程）

Ainu Language Education in Tokyo Metropolitan Area

WATANABE Kaori

Summary:
The current status of Ainu language education in Tokyo metropolitan area are investigated by having interviews with teachers and visiting Ainu language classes. Although several researches on Ainu language education in Hokkaido have been reported, there have been few studies in Tokyo metropolitan area. For the reason, we focus on the classes around Tokyo. It is found that many classes on Ainu language are held at present. On the other hand, we clarify lack of teachers and teaching aids. In order to solve the problem, it is important to enhance “Ainu language prestige.”